高崎経済大学論集　第44巻　第４号　2002　133頁～140頁

＜研究ノート＞

都市統治とイギリス宗教改革
―L.M.ヒッグズの研究を中心に―

唐　澤　達　之

Civic Governance and the English Reformation

Tatsuyuki KARASAWA

I

1970年代以降大きな進展を見せたイギリス近世都市研究は，Ｐ.クラークによって編集された『ケンブリッジ・ブリテン都市史　第２巻　1540-1840年』(2000年)[1]の刊行に見られるように，一定の成熟期に入ったと見ることができる．この間イギリス近世都市研究は，常に活発な議論が展開する場となった．中世後期から近世にかけての都市の盛衰をめぐる論争に始まり，その後いわゆる都市の「危機」と「安定」をめぐる議論が展開される過程で，議論の重心は，人口・経済を指標とした問題から，都市秩序の維持・都市統治の問題へと移動し，社会経済史研究を土台にした都市史研究が政治史研究へと接合されてきたといえよう．このような都市史研究の展開は，多様な研究領域が自立化した現在の歴史学にあって，それぞれの視点相互の緊張関係を意識しながら研究を進めることによって，歴史を総合的に捉える１つの方法として有効性を発揮することができたことと無関係ではあるまい[2]．

とはいえ，イギリス近世都市研究の現段階において，検討されなければならない問題は依然として多々あるといわねばならない．その１つが，宗教改革と都市の問題である．すでに1986年には，Ｐ.コリンソンが「宗教改革が都市にもたらしたものは何か」[3]と問題提起をしており，また，『ケンブリッジ・ブリテン都市史』にはＶ.ハーディングによる「宗教改革と文化1540－1700年」[4]と題する１章が盛り込まれてはいるが，その脚注を見てもわかるように，個別都市の実証的研究は依然として極めて少ない．ロンドン史を主要な舞台とした「危機」と「安定」の議論が，17世紀の革命史研究と密接に関連しながら，政治史研究との接点を探ってきているのに対して，同様に都市の政治・政治文化と密接に関連すると思われる宗教改革の問題が都市史研究において正面から取り

上げられてこなかったことは意外である．

しかしながら，ごく最近になって宗教改革と都市の関連を問う研究が刊行されつつあり，本稿は，最近の研究成果の一端を紹介することを目的としている[5]．本稿で取り上げるのは，コルチェスターにおける宗教改革に関するＬ．Ｍ．ヒッグズの実証的な研究『テューダー朝期のコルチェスターにおける信仰と統治』であり[6]，これを手がかりに，宗教改革と都市に関する研究を今後進めていく際に重要と思われる論点を整理して提示したい．

Ⅱ

ヒッグズの著書のテーマは，テューダー朝期のコルチェスターを事例に，都市統治において宗教と政治がいかに統合されているのか，両者の関係に内在する諸問題を明らかにすることにある．本書は３部から構成され，第１部「宗教改革への準備」では，テューダー朝初期にコルチェスターでいかに宗教改革への準備が進められたのか，宗教改革の前提条件が検討される．第２部「改革：行きつ戻りつ」では，1529 年に始まる初期の改革とメアリ期が，第３部「信仰と世俗権力の不安定な結びつき」では，エリザベス期が検討される．ただし，著者の最大の関心がエリザベス期における都市統治とカルヴィニズムの関係におかれていることは，第３部が本書全体のページ数の約半分を占めていることから明らかである．

第１部は，４つの章からなる．第１章「統治構造」では，都市統治の頂点に位置する 10 名のオルダマンおよびこの中から選出される２名のベイリフの職務・権限，そしてテューダー朝期にオルダマン職に就いた 98 名の富，職務遂行の意欲，信仰が明らかにされる．テューダー朝期には，都市支配層の権限が強化され，そして，都市支配層が相互に姻戚関係や友情によって結束していたとされる．

第２章「対外関係：貴族，法律家，影響力」では，都市と外部権力の関係が検討される．コルチェスターはバラであり，都市支配層は国王の役人としての側面と都市の代表としての側面をもっていた．都市支配層は，対外的に都市の利益を守るために，市書記，法律顧問官といった都市役職および都市選出の議席を，中央に対して影響力のあるジェントリや貴族（法律家であることが望ましい）に与えた．1560 年代まではオックスフォド伯の影響力が重要であったが，それ以降は都市支配層が熱烈なピューリタニズムに傾倒していくにしたがいその影響力は低下し，かわってピューリタンのフランシス・ウォルシンガム卿の影響力が高まる．

第３章「宗教改革前夜の教会と聖職者」は，宗教改革前夜のコルチェスターの教会組織と聖職者の状態が検討される．当市には，ベネディクト派のセント・ジョン修道院やアウグスティヌス派のセント・ボトルフ修道院といった修道院があったが，これらは市壁内外に土地を所有していたほか，市壁内外の教区教会のパトロンとして影響力があった．都市住民は，これらの修道院の様々なサー

ビス（礼拝，説教，慈善事業など）を享受することはあっても，彼らの帰属意識はまずもって教区教会にあった．コルチェスターには全部で 16 の教区教会があり，これらは，礼拝，説教，通過儀礼を提供するだけでなく，祭礼などを通じて共同体の一体性を生み出す機能を持ち，都市住民にとっては家族に次いで重要な社会関係を取り結ぶ場であった．コルチェスターは，教会組織の点からみて著しく貧困であったということはできないが，教区聖職者の不在や聖職禄の複数保有などの問題を抱えていた．

第 4 章「世俗における伝統的な信仰とロラード派：混合の可能性」は，宗教改革の思想と実践にコルチェスターの信者たちを引きつけた 3 つの条件，すなわち，宗教活動に対する信者たちの深い関わり（宗教ギルドの創設，教区役人としての教会活動への参加など），都市の宗教生活における都市支配層の役割，ロラード派の影響が検討される．宗教改革前夜のコルチェスターでは，カトリックもロラードもともに有力な勢力であり，カトリック信仰も，それがより個人的で直接的な神との関係の熱望を生み出した時には，変化への強力な触媒となりえたのであり，こうして，宗教改革前夜のコルチェスターでは宗教改革への準備が整えられていたのである．

続く第 2 部は 2 つの章からなる．第 5 章「ヘンリ期の宗教改革 1529-47 年」は 1529 年から 1547 年までのヘンリ 8 世期の改革の影響を検討する．この時期の都市支配層の対応は，ヘンリ 8 世の中道政策に忠実に従うものであった．ウェストミンスターでは大法官の職にあったトマス・オウドレィがコルチェスターの市書記であったことが，当市をして国王側につかせる背景となった．また，修道院解散の際には，解散修道院の土地財産の移動が 3 つの新しいジェントリの家系を生み出すとともに，それまで修道院が保有していた市内の教区教会のパトロニジの移動によって，市内における旧来の教会権力の支配力は弱められた．

第 6 章「エドワードとメアリの治世と遺言書の分析」は，エドワードによるプロテスタント化政策と，メアリによるカトリックへの復帰政策がコルチェスターに及ぼした影響およびそれへの都市支配層の対応のあり方，都市住民間のプロテスタントの浸透の程度を検討する．都市住民の遺言書の分析によれば，国王が改革の主導権を握っていたとはいえ，そしてまた，1540 年代半ばまでは伝統的なカトリックの慣習が全て捨て去られることはなかったとはいえ，コルチェスターにおける改革の受容は比較的早かったとされる．地理的にヨーロッパ大陸に近接していたこと，ロラード派の伝統や，トマス・オウドレィとの密接な関係などが，その要因として考えられる．それでは，プロテスタント陣営に比較的容易にはいったコルチェスターは，メアリ期におけるカトリックへの復帰政策にいかに対応したのだろうか．都市支配層は，基本的にはメアリの政策を受け入れたが，他方，コルチェスターの民衆の中にはメアリの政策に抵抗する者がおり，異端として処刑された者は比較的低い社会層に属するものが多かったのである．

第 3 部に移る．第 7 章「信仰の擁護者 1558-62 年」では，エリザベス即位直後のコルチェスターに

おける聖職者と教会が，インフレーションの進展による聖職者の収入減少，教区聖職者の不在や聖職禄の複数保有によって悪い状況にあったことが手短に明らかにされたのち，都市政府が，教会への出席の奨励，説教師の雇用，オランダからの宗教的亡命者の受け入れ，救貧事業など，宗教政策において指導力を発揮したことが明らかにされる．これらの背景には，1559年秋の選挙で都市支配層に入れ替わりがあり，より多くの改革派が都市政府のメンバーになったこと，ジュネーヴから帰国したばかりのジョン・ピュレンらがカルヴァン流の市政運営を採用するよう都市支配層に影響を与えたことがあった．

第８章「教会と信者 1562-75年」では，改革派による説教が都市住民に対して次第に影響を及ぼし，静かな変化が葬式，教育，聖書の所有などの面で起こりつつあった一方で，都市支配層とジュネーヴ帰りの改革者が進める社会統制に不満をもつ都市住民の抵抗が，改革派の聖職者やオルダマンに対する中傷文の形をとって現れ，また，こうした対立が，都市支配層内部の政治的対立とも絡み合っていく．

第９章「支配の強化 1575-80年」および第10章「社会統制の強化 1575-80年」は，この時期にコルチェスターにおいてピークに達する宗教的対立と社会的対立に対して，都市支配層が，都市統治の手続きを厳格にし，改革派に協力的でかつウェストミンスターにおいて大きな影響力のある代弁者を市書記ないし法律顧問官とし，さらに都市住民の風俗規律を統制することによって対応したことが明らかにされる．第10章では，バラの裁判所で裁かれた犯罪（性的犯罪，安息日厳守違反，怠惰，浮浪，違法ゲームなど）の分析，また悪行の温床とみなされたエールハウスの取締りの検討が行われる．また，社会規律を浸透させるものとして説教が重視され，都市政府が雇った説教師の役割が大きなものとなった．

第11章「コルチェスターのノースィと信仰　1580-93年」は，ニコラス・チョロナーにかわって説教師に就任したジョージ・ノースィの在職期間における，ピューリタニズム運動の成熟，ウィットギフトによるその制止，そして組織化された運動としてのその衰退が検討される．国教会による聖職者の統制，共通祈祷書の使用をめぐる諸問題（特にサープリスの着用，洗礼の方法），説教師であったノースィが持っていた長老制に対する急進的な信念が彼の停職をもたらしたことが明らかにされる．

第12章「信仰にもとづく統治の最盛期」は，1580年代に都市支配層と聖職者が行った諸政策，すなわち救貧政策，社会統制，説教の重視，グラマースクールの再建が検討されるが，と同時に，コルチェスターのピューリタニズム運動にとって最盛期を画するこれらの一連の政策が穏健なピューリタニズムへのより戻しをもたらすものであったことが明らかにされる．すなわち，都市政府はノースィの復職とグラマースクールの再建を勝ち取ったが，いずれも主教の管轄下に置かれたのであった．説教師とグラマースクールの校長の任命権は都市政府にあったが，いずれも主教権力への従属を前提としていた．

こうして1590年代にはピューリタンの改革に対する熱情は次第に冷めていくことになるが，こ

の 1590 年代の都市支配層の実態を検討するのが，第 13 章「新しい世代」である．1590 年代までには，コルチェスター住民の多数がプロテスタント化され，教区教会の状況もかなり改善され，都市支配層による政策の成果が明確に現れることになるが，と同時に，都市支配層のもとへの権力集中が，支配層内部の権力抗争を生み，彼らの信仰を掘り崩していくことになる．

Ⅲ

以上のように，ヒッグズの研究は，宗教改革期の都市統治が孕む諸問題を，都市支配層の対応のあり方を軸に，実証的に明らかにしたといえる．現在，個別都市における宗教改革の実証研究は未だ少ないので，宗教改革期の都市の経験に関して一般的な議論を展開するような段階にはないが，個別都市の実証的研究が，単なる個別都市の経験の累積に終わらないように，より一般的な議論に，そして比較史的な議論に展開していくためには，研究の作業過程でいくつかの重要な論点を整理しておく必要があるように思われる．本書は，無視することのできない重要な論点を多く提示しているように思われるので，ここではそれらを整理しておきたい．さしあたり，大きな論点として，ここでは 2 点指摘しておく．1 つは，都市支配層を取り巻く権力状況であり，もう 1 つは，政治と宗教の間の緊張関係である．

都市は決して自己完結的な宇宙ではなく，都市支配層は，宗教改革の過程で内外の様々な権力と対峙しなければならなかった．まず，都市支配層の政策に大きな影響があったのは王権であった．コルチェスターは自治都市であり，都市支配層は都市共同体の代表としての側面だけでなく，国王の役人としての側面をもち，彼らの権力の源が王権にあった以上，王権は宗教改革期を通じて都市支配層の対応に大きな影響力があった．宗教改革期を通じて都市支配層が王権に対してとった姿勢は，基本的には忠実なものであったが，このことは，プロテスタント化が比較的早かったコルチェスターの都市支配層にとって，メアリ期におけるカトリックへの復帰政策に不本意ながら従わざるを得なかったり，また，都市内部における宗教的な対立を増幅させたりする側面もあった．

次に，教会権力との関係である．コルチェスターは，宗教改革前後を通して司教座（主教座）都市ではなく司教（主教）権力はそれほど強くなかったと考えられる．また，修道院が市壁内外に存在したが，それらの重心は市壁外にあり，歴史的には都市政府との間に対立があったけれどもそれほど激しいものではなかった．宗教改革期における修道院の解散は，旧い教会の影響力を市内から一掃する上では大きな意義をもったといえるが，解散修道院の土地財産を取得することによって新しいジェントリが成立し，新たな権力状況が生まれたということができる．さらに，宗教改革期に，都市支配層が説教師の職を設置するなど宗教政策において主導権を発揮することになったことは，都市が宗教政策において一定の自律性を獲得したことを意味するが，しかし，テューダー朝末期にはエリザベスが教会に対する支配権を強化するのにともない，その自律性は次第に侵されていった．

第 3 に，王権と都市の間にあって，都市支配層にとって大きな影響力があったのは，ジェントリ

や貴族であった．特にコルチェスターにとって直接大きな役割を果したのは，都市支配層が，市書記官，法律顧問官の都市役職や，都市の議席を与えたジェントリ・貴族であった．このことは，従来，都市の自律性を損なうものとして理解されてきたきらいがあるが，しかし，これらの職に就いた者は，コルチェスターの利益を擁護し，また都市支配層の宗教政策の行き過ぎをチェックするなどよき助言者となり，都市支配層が主導する宗教改革にとって基本的には貢献したといえる．しかし，1570年代にカトリックのオウドレィ家とプロテスタントのクリスマス家が対立したことなどに見られるように，宗教的対立の原因を作り出すこともあった．パターソンが指摘するように，都市のパトロニジが中央と地方を結ぶパイプとして機能したことは，官僚制が比較的未発達であったイギリス絶対王政の特質を理解する上でも重要な論点となるだろう[7]．

最後に，都市支配層と都市住民の関係に触れておく必要がある．宗教改革期には，都市支配層は寡頭支配を強化していったとされる．制度的に見れば，選挙人がオルダマンの同意なしにオルダマンを解任できなくなったことや，また一時的にではあったが市会議員の選出権をオルダマンが握るなどの変更がみられた．こうした権限強化を背景に都市住民のプロテスタント化を推進する一方で，社会統制を展開していくのである．しかし，ヒッグズは，都市共同体の内部編成について立ち入った検討を加えていない．都市住民のプロテスタント化が比較的速やかに進展していった要因は，都市支配層の指導力や大陸との地理的近接だけに求めることはできないように思われ，ギルドや教区といった部分共同体が都市共同体の中にどのように位置づけられていたのか，また，都市共同体の社会経済構成はいかなるものであったのか，さらには，社会構成上の特質とプロテスタンティズムとの間に何らかの親和性がなかったのかどうかを今後検討する必要があるだろう．

ともあれ，ヒッグズは，都市における宗教改革の展開を検討する際に，都市支配層がおかれていた権力状況を多面的に浮き彫りにしており，その点高く評価できると思われる．というのも，王権，教会権力，ジェントリ・貴族，都市共同体との関係，これらは，他の都市における宗教改革の展開を見ていくときに見落とすことのできない観点であり，その展開のあり方に見られる都市間の差異を生み出す変数となるように思われるからである．しかしながら，本書を読む限り，コルチェスターと他の都市を比較するという観点はあまり意識されていないように思われる．個別都市の宗教改革研究の蓄積が少ない現段階ではやむをえないところもあるかも知れないが，M.マクレンドンのノリッヂに関する研究のように，他都市との比較を意識しながら，ノリッヂにおける宗教改革のあり方の特質を浮かび上がらせようとする研究がある[8]．筆者もすでに，ブリストルとノリッヂを比較しながら，宗教改革の展開のあり方を規定する要因を仮説的に提示したことがある[9]．また，ヨーロッパ大陸をも視野に入れると，ジュネーヴの市政改革がモデルとなったことは比較史的な観点から見て興味深い問題である．コルチェスターの市政運営において，ジュネーヴから帰国したイギリス人が大きな影響を及ぼしたことが本書では指摘されているが，彼らが，大陸の都市とイギリスの都市の間に，権力状況や都市共同体の構成の点でどのような違いあるいは共通点があると考えていたのだろうか．

第２の点に移ろう．都市統治における政治と宗教の間の緊張関係は，本書の大きなテーマである．ヒッグズによれば，コルチェスターでは，エリザベス期にはいってオルダマンの入れ替えにともなって，都市支配層が宗教改革を主導するようになり，1580 年代には都市支配層と聖職者の協働による改革が最盛期を迎えるとされるが，このような政治と宗教の融合には限界があった．その理由は，宗教は結束をもたらすこともあるが，それよりもしばしば政治的対立の口実となったこと，また，全国レベルでの宗教政策の展開と一致する限りにおいて融合が可能であったことに求められる．ヒッグズによれば，宗教と政治の融合に内在するこうした矛盾は，17 世紀半ばの内乱期までイギリス全体で繰り返し現れたとする．このように宗教と政治の間の緊張関係とそれが生み出すダイナミズムを明らかにした点で，ヒッグズの研究は高く評価できる．ただ，政治と宗教の融合が難しいものであったとしても，その融合を試みた点にコルチェスターの特徴があるようにも思われる．というのも，宗教改革期におけるノリッヂの都市支配層の動向を詳細に跡づけたマクレンドンの研究によれば，ノリッヂの都市支配層は政治と宗教を切り離して市内における紛争を処理したとされており，政治と宗教の関係も都市によって違いがあると思われるからである．

いずれにせよ，コルチェスターの都市支配層がピューリタニズムを受容したのは何故か，という問いは，依然として大きな問題であるが，この問いは，政治と宗教の間の関係にとどまる問題ではない．というのも，ヒッグズは，ピューリタニズムを受容した都市支配層による都市住民に対する社会統制を問題にしているからである．ピューリタニズムと社会統制の間の関連を重視したのはK．ライトソンとD．レヴァインの研究であったが[10]，これに対してM．イングラムやM．スパッフォードは，ピューリタニズムが見られない地域・時代（中世末）にあっても社会統制が見られることを指摘し，社会統制がピューリタニズムとはさしあたり無関係に人口増加・貧民の増加といった社会経済的要因によって規定されているとしている[11]．また，ピューリタニズムを受容した社会層の問題がある．中位の階層の人々がピューリタニズムを受容したことは基本的に確認できるとしても，スパッフォードは，ピューリタニズムがより下層の民衆にまで浸透していたことを実証的に明らかにし，ピューリタニズムを特定の階層に結びつけることを批判し，民衆が単に中位の階層の人々による上からの社会統制の客体にとどまるものではないとしている[12]．ヒッグズは，ピューリタニズムと社会統制の間の関連に必然性を認めてはいないようであり，むしろ社会経済的要因を重視しているように思われる．だが，ヒッグズは，コルチェスターにおける貧民問題をはじめとする社会問題に触れてはいるけれども，その実態についてはほとんど明らかにしてはいない．もとより，それを期待するのは，本書に対して過剰な期待かも知れないが，やはり，この時期の社会経済変化は都市共同体に大きな影響を及ぼしたと考えられるのであり，今後社会経済史研究との接合が必要であるように思われる．その際，依然として実証研究が意外にも手薄なコルチェスターの主要産業であった織物工業の動向が，都市の社会経済を捉えるためにも，そしてまたオランダからの宗教的亡命者の受け入れを通じた大陸との社会経済的・政治的・宗教的つながりを理解する上でも重要になってくるように思われる．

（からさわ　たつゆき・本学経済学部助教授）

註

（1） P. Clark ed., *The Cambridge Urban History of Britain, II, 1540-1840*, Cambridge, 2000.

（2） 1970 年代以降の都市史研究の動向については，拙稿「都市」岩井淳・指昭博編『イギリス史の新潮流―修正主義の近世史―』彩流社，2000 年，を参照.

（3） P. Collinson, *The Birthpangs of Protestant England: Religious and Cultural Change in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, London and Basingstoke, 1988, p. 49.

（4） V. Harding, 'Reformation and Culture 1540-1700', in Clark ed., *Cambridge Urban History of Britain, II*, pp. 263-288.

（5） P. Collinson & J. Craig ed., *The Reformation in English Towns 1500-1640*, London, 1998 ; R. Tittler, *The Reformation and the Towns in England : Politics and Political Culture, c.1540-1640*, Oxford, 1998 ; M. C. Skeeters, *Community and Clergy : Bristol and the Reformation c.1530-c.1570*, Oxford, 1993 ; M. C. McClendon, *The Quiet Reformation: Magistrates and the Emergence of Protestantism in Tudor Norwich*, Stanford, 1999; 拙稿「イギリス近世都市における寡頭支配」『高崎経済大学論集』42 巻 2 号，1999 年などを参照.

（6） L.M.Higgs, *Godliness and Governance in Tudor Colchester*, Ann Arbor, 1998.

（7） C. F. Patterson, *Urban Patronage in Early Modern England: Corporate Boroughs, the Landed Elite, and the Crown, 1580-1640*, Stanford, 1999.

（8） McClendon, *Quiet Reformation*.

（9） 拙稿「イギリス地方都市における宗教改革―ブリストルとノリッヂ―」『高崎経済大学論集』43 巻 4 号，2001 年.

(10) K. Wrightson & D. Levine, *Poverty and Piety in an English Village: Terling, 1525-1700*, New York, 1979.

(11) M. Ingram, 'Religion, Communities and Moral Discipline in Late Sixteenth and Early Seventeenth-Century England: Case Studies' , in Kaspar von Greyerz ed., *Religion and Society in Early Modern Europe 1500-1800*, London, 1984; M. Spufford, 'Puritanism and Social Control' , in A. Fletcher & J. Stevenson eds., *Order and Disorder in Early Modern England*, Cambridge, 1985. また，わが国でピューリタニズムと民衆文化の問題を取り上げた研究としては，常行敏夫『市民革命前夜のイギリス社会』岩波書店，1990 年；今関恒夫「無秩序へとさまよいだすとき―イギリス革命前夜における「正統派ピューリタン」と社会－」同他著『近代ヨーロッパの探求③　教会』ミネルヴァ書房，2000 年，所収，などがある．また，研究史の整理として，菅原秀二「民衆文化とその変容」岩井・指編『イギリス史の新潮流』所収，を参照.

(12) M. Spufford ed., *The World of Dissenters, 1520-1725*, Cambridge, 1995.

［付記］本稿は，2000 年度高崎経済大学特別研究奨励金による研究成果の一部である.